性的倒錯はいかにして可能か*

佐金 武　　大畑 浩志　　高野 保男

概要

Amid the U.S. counterculture's "free love" movement, Nagel (1969) introduced the philosophical issue of sexual perversion. Although he did not revisit this topic, his proposal sparked ongoing debates. As Solomon (1974) suggested, Nagel's view may be seen as a liberalist reaction against liberalism (or radicalism) itself that promotes unrestricted sexual pleasure and self-determination. Generally, perversion indicates a deviation from norms, implying the existence of such norms in sexuality. Nagel supported sexual freedom but hinted at inherent limits within this liberalist ideal.

Over fifty years later, societies increasingly accept diverse gender identities and orientations, though resistance remains strong. A growing awareness of human rights demands more careful consideration of sexual interactions, while technological advancements such as AI and VR continue to reshape the sexual landscape. This paper explores the viability and rational basis of sexual perversion and its related norms in the contemporary context.

The discussion follows this structure: Section 2 provides preliminaries for discussing sexual perversion, including a clarification of the concept's application. Section 3 reviews past debates, distinguishing "Normativism" (which asserts the existence of sexual norms and deems deviations from them perversions) from "Anti-normativism" (which denies such norms, rendering perversion meaningless). Section 4 introduces a new perspective on sexual perversion, presented in two stages. Section 5 proposes conditions for a pleasure to be deemed "sexual", setting aside normative queries about such desire. Section 6 reinterprets "perversion" as a type of irrationality, focusing on the normative aspect of sexual perversion. If successful, these arguments indicate that some sexual norm can be maintained that makes sexual perversion a meaningful concept.

Keywords: 性的倒錯、(無)規範主義、性的快楽、不合理、リベラリズム

* *CAP* Vol. 17 (2026) pp. 241-267. Submitted: 2026.4.6. Accepted: 2026.9.16. Category: 研究論文(原著論文). Published: 2026.10.5.

1 はじめに:性的倒錯と性に関する規範

ネーゲル(Nagel 1969)が性的倒錯を哲学上の問題として主題化した 1969 年は、米国のカウンターカルチャーにおいて「フリー・ラブ」の標語のもと、セックスの自由が叫ばれた時代にあたる。我々が知る限り、ネーゲルがその後このテーマについて論じたことはなかったが、現代に続く論争の口火を切った彼の目論見は、ソロモン(Solomon 1974)が鋭く感じとったように、性的快楽の享受やそれにまつわる自己決定を無際限に認める性のリベラリズム(あるいはラディカリズム)に対する、リベラリスト自身の思想的抵抗として理解することができるかもしれない。倒錯とは一般に何らかの規範からの逸脱を指す。したがって、性的倒錯が起こりうるということは、性に関する一定の規範が存在することを含意する。ネーゲルは性の自由についてリベラリストの理念を共有しつつも、そこには自ずとこの理念の本義にもとづく限界があることを示唆しようとしたともいえる。

ネーゲルのこの問題提起から半世紀以上が経過した今、世界は性自認や性的志向の多様性を受容しつつある一方、こうした動きへの反発もいまだ根強い。また、人権意識の高まりを背景に、人々の性的な関わりについてはより慎重な配慮が求められている。さらに、人工授精をはじめとする不妊治療法やインターネットを基盤とする情報通信、AI(人工知能)、VR(バーチャル・リアリティ)といった革新的技術の発展は、我々の性をとりまく状況を劇的に変化させ続けている。本論文の目的は、この現代社会において性的倒錯という考え(および、それと表裏一体の関係にある性に関する規範)が維持可能か否か、もし維持可能であるとすれば、どのような理路にもとづいてそういえるかを明らかにすることにある。

その議論の流れは次のとおりである。第 2 節ではまず、性的倒錯の可能性を論じるうえで不可欠と思われる予備的考察、とりわけ、「性的倒錯」は何に適用される概念であるかの明確化を行う。続く第 3 節では、性に関して何らかの規範が存在する(ゆえに、そこからの逸脱はある種の倒錯である)と主張する「規範主義」と、性的倒錯とむすびつくあらゆる規範の存在を否定する「無規範主義」に大別して、これまでの論争状況を概観する。これを踏まえ第 4 節では、性的倒錯に関する新たな考えを提示する。そのアプローチは二段階で構成される。第 5 節において我々は、正しい性的欲求とはどのようなものかという規範的問いに代えて、特定の快楽が「性的」であるための条件についてあらためて検討する。次の第 6 節では、「倒錯」を(性に限定せず)ある種の不合理として捉え直す。性的倒錯の規範性が問題になるのはこの段階である。これらの議論が正しければ、性的倒錯を可能にする規範はたしかに存在し、したがって、それはけっして無意味な概念ではないことが示されるだろう。そこで明らかになるこの概念の内実は、ネーゲルの考えに一部通じる面もありながら他の面ではまったく異なり、これまで論じられたどの見解ともおそらく同じものではない。

2 予備的考察:倒錯した性的行為と傾向性

「性的倒錯」の烙印を押される恐れのある行為には、具体的にどのようなものが含まれるだろうか。プリースト(Priest 1997)はこのテーマを論じるにあたり、次のような性的行為のリストを提示した。

(1) 正常位での異性間性交
(2) 他の体位での異性間性交
(3) 口腔性交(クンニリングス、フェラチオ)
(4) マスターベーション
(5) 同性愛
(6) 集団セックス
(7) 肛門性交(男色、獣姦)、異性間であれ同性間であれ
(8) 窃視症
(9) 露出症
(10) 窃触症
(11) 性的サディズムとマゾヒズム
(12) 小児性愛
(13) フェティシズム
(14) 異性装倒錯症
(15) 動物性愛(獣姦)
(16) 嗜尿症
(17) 屍姦症
(18) 糞便愛好

ここには正常と認められる性的行為もある一方で、明白な性的倒錯とみなされる行為もあるように思われる。そして、このグラデーションのどこかに、倒錯的な性のあり方とそうでないものの線引きが存在すると考えられるかもしれない。だがプリーストも指摘するように、どのような性的行為がどれほど倒錯しているかに関して、人々の意見が一致することはほとんどなく、時代や文化に応じて大きく異なる。また、ラブドールやセックス・ロボット、バーチャル・キャラクター、オンライン・セックスといった現代の性に関わる技術的進化を考えると、検討すべき事例は驚くほどたくさんあるだろう。にもかかわらず、プリーストが提示するリストは少なくとも、一般に「性的倒錯」という言葉と結びつきうる諸々の行為が存在することを示唆している。

ところで、本来的に「倒錯」と呼びうるのは個々の行為だろうか。それとも、性癖や趣味といった個々人の傾向性だろうか。(プリーストは前者の考えを前提とし、後に見るように、バルツリー(Baltzly 2003)は後者の側面を中心に議論を展開している。)我々の言語実践はいずれの用法も許容するように思われる。(我々はまた人に対して「倒錯」を適用する。だが、これに関しては次のように考えられる。すなわち、人が倒錯しているとされるのは、その人が倒錯した行為を行うか、倒錯した傾向性を有するときである。これが正しいとすれば、行為と傾向性の倒錯に加えて、人の倒錯について議論する必要はない。)

再び先のリストを見てみよう。ある種の行為はそれ自体で倒錯と呼ばれるかもしれない。だとすれば単

純に、倒錯した性的傾向性とは性的に倒錯した行為をする傾向性であると考えればよいのではないか[*1]。しかし、これはあまりもっともらしくない。第一に、一度限りであれば必ずしも倒錯とはいえない行為（たとえば、ちょっとしたサディスティックな愛情表現）も習慣化され執拗に繰り返されるならば、倒錯した傾向性を構成する可能性がある。第二に、一度限りの行為であっても、何らかの倒錯した性的傾向性を仮定しなければ、なぜそれほど特異な行為がなされたかを説明することがむずかしいようなケースもある。事実、先のリストにおいて比較的下方に位置する行為はそうした事例であるかもしれない。（他方、一度も発現したことがなく、意識されたことすらない性的傾向性（たとえば、無自覚な好糞症）について、それが倒錯しているということにはほとんど意味がないだろう。）要するに、倒錯した性的傾向性については行為をベースに、次のように考えるのがもっともらしい。

> 【性的に倒錯した傾向性】
> ある傾向性が性的に倒錯しているとされるのは、（i）それが「性的倒錯」とみなされる行為をする傾向性であるか、（ii）それを有することで習慣的に発現する行為が集合的に「性的倒錯」とみなされるか、または、（iii）それを有することが（一度限りでも）明白に「性的倒錯」とみなされる行為の発現の根拠となるときである。

これを踏まえ以後の議論では、「性的倒錯」を行為にも傾向性にも適用可能な概念として扱うことにしよう。ただし、ここで明らかになったのは、この概念が一般にどのようなときにどのカテゴリーに適用可能であるかにすぎず、性的倒錯とは何かについてはまだまったく触れていない。そして、これこそが本論文の主たる関心である。

3 規範主義と無規範主義

本節では、性的倒錯をめぐるこれまでの論争状況を批判的に概観し、独自の観点から各見解の整理を試みる。我々の考えではまず、大きく二つの立場が区別される。すなわち、性的倒錯を可能にする何らかの規範が存在すると主張する「規範主義」と、そのような規範の存在を否定する「無規範主義」である。規範主義はさらに、どのような規範を想定するかに応じて三つの見解に分かれる。第一に、生殖や種の保存、人間社会の維持と存続を重視し、人間にとって自然とされる規範から逸脱する性的行為や傾向性を性的倒錯と考える「自然主義」がある。第二に、性を通じた人格的充実や人間性の開花に価値を見出し、そこから逸脱するものを性的倒錯とみなす「完成主義」がある。第三に、性的倒錯をある種の道徳的悪ないし不正とみなす「道徳主義」がある。以下、これらの見解を順に検討する[*2]。

[*1] プリースト（Priest 1997: 360, fn. 1）は実際、倒錯した性的傾向性をこのように定義することを示唆している。

[*2] これから我々が提示する、性的倒錯に関する諸見解の分類は網羅的ではないものの、論争状況の有益な見通しを得るには十分だろう。ハルワニ（Halwani 2018: 280–303）のサーベイもあわせて検討せよ。ちなみに、ハルワニ（*ibid.*: 280–281）は、「よいセックス」のよさについて、（i）道徳上のよさ、（ii）快楽や満足に関わるよさ、（iii）自然であ

3.1 自然主義

自然主義によれば、セックスの目的は生殖を通じた種の保存や、人間社会の維持と存続に他ならない。この目的を規範として、それに反するか資するところのない行為は不自然であり倒錯とみなされる。自然主義の古典的な考えは、キリスト教の影響下にあった哲学にはっきりと現れている。とりわけ、中世の神学者トマス・アクィナスの主著『神学大全』第 2 部 154 問においては、生殖につながらない性的行為には「自然本性に反する悪徳」が見出されると書かれている（アクィナス 1991: 54）。とはいえ、生殖につながりさえすれば常に正常なセックスと認められるわけではない。たとえば、不特定多数との性交は、一夫一妻の結婚制度に守られた正しい子育てのあり方ではないとされ、そもそも無秩序な姦淫は節制の徳に反する罪とみなされる。

現代ではキリスト教的世界観ではなく進化論の観点から、自然主義が論じられることがある。たとえばラディックは、「性的欲求のさまざまな対象や目標のなかから自然なものを選ぶときその根拠となるのは、生殖につながりうる種類のものであるということ以外にありえないように思われる」（Ruddick 1975: 91）と述べている。ただしラディックによれば、個々の性的行為が実際に生殖につながるかどうかは問題ではなく、生殖の可能性に反しないことが性的欲求を自然なものと考える要件である。そしてまた、ラディックの現代的な自然主義は、性的倒錯を罪や悪といった道徳的概念から切り離す点でも、古典的な自然主義と大きく異なる。ラディックは、「自然であることと善であることの間には、負の相関であれ正の相関であれ、いかなるつながりもない」（*ibid*.: 95）と述べている。

これに対してグレイ（Gray 1978）は、自然であるとは適応的であることだと考え、進化の過程において適応的ではない性的活動は倒錯となりうると示唆する。その一方でグレイはまた、性的活動の適応的な機能

ることのよさの三つを区別している。このうち、（i）については我々の分類における道徳主義の考えに対応し、（iii）は自然主義と一致するが、（ii）は複数の立場にまたがって認められる「よさ」であり、我々の知る従来の見解において、明示的にこのよさを基準として倒錯を捉える見解は見当たらない。このように、ハルワニのサーベイではいくつかの重要な概念的整理が行われているものの、性的倒錯をめぐる諸見解に対する個別的批判という側面が強く、あまり一貫した見通しが示されているようには見えない。本節での我々の目的はむしろ、以後の議論のため、異なる見解を理解し整理するための基本的な枠組みを得ることにある。

また、我々の分類は必ずしも排他的ではないことに注意してほしい。たとえば、後に見るように、スクルートン（Scruton 1986）の見解は完成主義に分類されるが、彼自身の考えでは性的倒錯は道徳的な悪である。（したがって、スクルートンを派生的な意味で道徳主義者とみなすことも可能である。）他方、道徳主義に分類されるバルツリー（Baltzly 2003）の見解は、完成主義的な倫理（徳倫理）にもとづくように見える。（それゆえ、バルツリーを完成主義者に分類することも不可能ではないだろう。）ちなみに、我々の分類における完成主義はビーゴン（Begon 2019: 344−346）のそれと重なる（ただし、どの論者を完成主義者とみなすべきかに関しては意見の相違がある）が、その他の点では整理の枠組みは大きく異なる。とりわけ、本論文では記述的（descriptive）か指令的（prescriptive）かという区別（*ibid*.: 343−344）は採用しない。（この区別については、ハルワニ（Halwani 2018: 281−282）の解説も参照せよ。）というのも、性的倒錯にまつわる何らかの規範を想定する立場においてさえ、一度その基準が明確に示されたならば、特定の性的実践が倒錯であるかどうかを判別するさらなる評価的観点は必要ないからだ。（我々はまた、記述的か改訂的（revisionary）かという区別についても、諸見解を分類する本節の目的では用いない。ある基準が規範的であるかどうかという問題と、その基準を採用するべきかどうかという問題の混同を招くおそれがあるからだ。）我々の考えでは、性的倒錯を可能にする規範が存在するかどうかが真の問題である。

とは組織的で安定した社会の形成と維持であるが、どのような活動が適応的かは可変的であって、必ずしも生殖に限定されないと述べる。たとえば、同性愛やマスターベーションも状況によっては適応的でありうる(*ibid.*: 198)。自然さと道徳の関係についてはグレイもまたラディックと同様に、「ある活動が性的に倒錯しているか否かの判断は、その行動が性的活動の自然で適応的な機能と調和しているかという事実に関する問いに適切に答えるものである限り、記述的かつ非評価的であり、したがって、いかなる道徳的含みも伴わない」(*ibid.*: 199)と明言する。グレイも認めるように、このことは性的倒錯が不道徳ではないことを意味しない。しかし、適応的であること(自然さ)と道徳性の間につながりをもたせるには、何らかの道徳理論が別途必要になるという。

さて、このような自然主義がいくつかの大きな困難を抱えることは明らかだと思われる。まず、古典的なバージョンの自然主義においては、生殖につながらない同性愛やマスターベーション、避妊具を使用するセックスは典型的な倒錯と判定されることになるだろう。しかも、こうした行為は自然本性に反する悪徳とみなされる。たしかに、特定の文化圏では同性愛や避妊は実際にタブーとされており、古典的な自然主義の考えが今なお支配的といえるかもしれない。だが現代のリベラルな目で見れば、性の多様性に反する、こうした抑圧的な社会のあり方は控えめにいっても問題があるだろう。いずれにせよ、生殖につながらない性がなぜ不自然とされ悪徳とみなされねばならないかについて、一定の説得力をもつ正当化がなされない限り、古典的な自然主義を是認することはむずかしいといわざるをえない。

現代的な自然主義ではたしかに、自然なセクシュアリティの観念と道徳的判断のむすびつきは否定される。しかし、自然な性のあり方とはどのようなものか、そして、不自然とされる性のあり方がなぜ倒錯とみなされねばならないかはやはり判然としない。生殖の可能性に反する性的行為はどうして、不自然とされ倒錯とみなされねばならないのか。また、適応的でないことがなぜ倒錯となるのか。(ただし、グレイは「倒錯」という侮蔑的な言葉の使用に関して注意を促している(*ibid.*)。)現代的な自然主義の考えにしたがえば、何が性的倒錯であるかは大部分、科学技術の発展に依存することになるだろう。たとえば、人工授精が人間社会の維持と存続にとって最適解となる未来が訪れるとすれば、あらゆる異性間セックスが倒錯とみなされるかもしれない(Levy 1980: 197)。このように、生殖の可能性や適応という観点から性の規範を捉える限り、そこからの逸脱としての倒錯は個々人の行いというよりもむしろ、我々が直面する状況によって決定される集団的な問題となるだろう。

3.2 完成主義

完成主義は、性を通じた双方の人格的充実や人間性の開花に価値を見出し、そのような可能性を阻む性的実践を倒錯とみなす。完成主義の第一の提唱者はネーゲル(Nagel 1969 and 1979)だ。ネーゲルによれば、性的関係の基本は、「相互人格的な性的認知(interpersonal sexual awareness)」(Nagel 1979: 49)である[*3]。二人の男女、たとえば、ロミオとジュリエットが互いの存在に気づき、それぞれ性的興奮を覚

[*3] 「相互人格的な性的認知」という言葉は、ネーゲルの論文集の下記の件に現れる。「私がこれまで説明してきたレベルの相互人格的な性的認知を発達させることができない生物について、それを発達させることができないがゆえに逸脱しているとはいえないことは明らかだ。…だが、人間は妨げられることがない限り、何らかの形で相互人格的な

えたとする。しかし、これはまだはじまりにすぎない。ネーゲルのいう相互人格的な性的認知が本格的に駆動するには、ロミオがジュリエットに対して興奮するだけでなく、その興奮を認めたジュリエットがまさにその認知により興奮し、さらにその興奮を認めたロミオがさらに興奮を高め…といった仕方で、両者が合わせ鏡のような性的興奮の構造のなかに巻き込まれる必要がある。このような構造を排除する倒錯した性的実践として、窃視症や露出症などの個人的な性癖、相手の人格を無視することで成り立つように見えるサディズムとマゾヒズム、人ではなくその部位や衣服または靴を愛着の対象とするフェティシズムなどが挙げられる。他方、さまざまな体位でなされる性交や口腔性交、そして同性愛などは、相互人格的な性的認知を阻害しない限り倒錯とは見なされない。

こうした議論を受けてソロモン（Solomon 1974）は、ネーゲルがセックスの形式的側面にのみ着目していることを批判する。ソロモンによれば、セックスはある種の「ボディ・ランゲージ」であり、その本質は様々な身体的ジェスチャーによって何かを語ることにある。ボディ・ランゲージとしてのセックスには、少なくとも二つの逸脱の可能性がある。一つは表現形式の逸脱であり、もう一つは表現される意味内容における逸脱である。この観点から見れば、サディズムとマゾヒズムのような、ネーゲルが倒錯とみなす事例は単に形式上の逸脱であるにすぎない。それよりも問題が大きいのは意味に関わる逸脱である。形式的にごくありふれたセックスであっても乏しい内容しかもたないならば、無害ではあるが倒錯となりうる。また、オーガズムの後に豹変する偽りの優しさや愛情は不誠実なセックスであることを示唆するゆえに、偽なる内容をもつ「嘘」に相当する悪しき倒錯である。さらに、コミュニケーションを排除するフェティシズムや、その成立の可能性が低い動物性愛は（おそらく形式と内容の両面において）倒錯的である。マスターベーションもいわば「独り言」のようなものであり、本来のコミュニケーションに対して二次的でしかない。

ところで、ネーゲルも彼を批判するソロモンも、倒錯が評価的な概念であることを認める一方、それ自体が道徳的な含みをもつとは考えていない。ネーゲルは明示的に、「我々は人々の美しさや健康、知性といったものについて、道徳的ではない評価的な判断を下す。人々のセクシュアリティに関する評価もこの点では同じかもしれない」（Nagel 1969: 16）と述べている。これに賛同してソロモンは、「倒錯したセックスは必ずしも悪いわけではなく、不道徳なわけでもない」（Solomon 1974: 345）と応じている。

こうした見解とは対照的にスクルートン（Scruton 1986）は、性的倒錯は道徳的な悪でもあると論じる。正常な人間本性にはまず、「自らの社会的本性に関する認識を表現する相互人格的な態度」（*ibid.*: 289）が含まれる。性的欲求も双方の人格的充足に向けて方向づけられている必要があり、他人を排除するナルシシズムや独我論を克服し、最終的に愛に向かうものでなければならない。というのも、愛こそが人生を豊かにする美徳であるからだ。それゆえ、「他人を避け消去し、その具現化を身体の猥褻な知覚によって抹消する性的解放を見出す習慣」（*ibid.*:343）にほかならない性的倒錯は、「愛する能力を無力化するという点でまさに悪徳」（*ibid.*: 338）である。このような考えにもとづき、動物性愛や屍姦、フェティシズム、小児性愛、相手の人格を否定することのうえに成り立つタイプのサド・マゾヒズム、そして、相互人格的な出会い

性的認知を発達させる傾向があるとすれば、その発達を阻害するような事例は不自然または倒錯的と呼ばれる可能性がある」（*ibid.*）。ただし、ネーゲルの 1969 年の論文では、類似の言葉の使用は見られるものの、この用語は使われていない。

を避けるための代替的なマスターベーションは倒錯であると同時に、愛することを阻害する道徳的な悪とみなされる。

スクルートンの議論において、同性愛は倒錯ではないにせよ、異性愛に対して道徳的に劣るかもしれないという示唆はとりわけ物議をかもす。彼の考えでは、同じジェンダー間での性愛関係は他者性にまつわる根本的経験を欠いており、性を通じた互いの人格の成熟につながらないため、異性愛に対して劣るように見える(*ibid*.: 305–311)。つまり、同性愛は真の人間性の開花を阻害する可能性がある。

レヴィンソン(Levinson 2003)もまた、彼独自の完成主義的観点からこうしたスクルートンの考えに同調する。レヴィンソンによれば、我々は人生をより豊かなものにするため、自らが有する能力や機会を最大限に活用すべきであり、そうしないことは「倒錯(perversion)」とはいわないまでも「不合理(perversity)」である[*4]。たとえば、単調なブルースの進行を繰り返す天才ピアニスト、ご馳走が用意されてもベーグルとクリームチーズしか口にしない家族、友人に恵まれているのに余暇はビデオゲームに没頭する若者、これらの例はいわば「宝のもち腐れ(perversion of their talents)」であり不合理である(*ibid*.: 30)。性愛に関しても、「性的経験に対する人間の可能性の深刻なまでの不十分な活用」(*ibid*.)は不合理とみなされる。たとえば、動物性愛や屍姦、フェティシズムは明らかにそうであり、窃視症は不合理なだけでなく不道徳な側面をもち、無目的な禁欲主義やマスターベーションにもやはり不合理な部分がある。そして、同性愛については(異性愛も可能な条件のもとでは)、「異性愛関係を開始し維持する際に求められる勇気や成熟、信頼のような特定の徳を涵養する機会が狭められてしまう」(*ibid*.: 41)ため、比較の問題として不合理の誹りを免れないとレヴィンソンは考える。

さて、このような完成主義の考えについては、少なくとも三つの批判が思い浮かぶ。第一に、完成主義では性が別の目的(双方の人格的充実や人間性の開花)のための手段として捉えられており、性的行為それ自体の充足感や快楽がないがしろにされているように思われる。たとえば、ボディ・ランゲージとしてのセックスというソロモンの考えに対してゴールドマンは、「セックスをコミュニケーションの手段として分析することは、行為それ自体の内在的本性と価値を見落とすことに等しい」(Goldman 1977: 276)と述べ、厳しい批判を展開する。ゴールドマンのこうした指摘は、セックスに別の目的を見出す完成主義一般に当てはまる。(いうまでもなく、セックスを生殖の手段と見る自然主義も同様の批判を免れない。)

第二に、完成主義が掲げる人格的充実や人間性の開花という目的は、控えめにいっても曖昧であり、これらの目的を共有する論者の間でもその内実は大きく異なるように思われる。この潜在的な見解の相違は、倒錯が道徳的な悪であるかどうかや、同性愛をめぐる議論において看過できない形で現れている。これと関連して第三に、完成主義は何らかの理想的なセクシュアリティを自明視し、そこからの逸脱を性的倒錯と捉える点において過度にパターナリスティックであるように見える。ビーゴンも危惧するように、このような考えは、「国家の中立性や様々な生活様式への寛容、個人の自律の重要性、そして個々人が自らの善の構想を形成し追求することを可能にすることへの、政治的リベラリズムのコミットメントと相容れない」(Begon 2019: 346)ように思われ、問題のないはずの性的行為を不当に評価し、性的マイノリティをしいた

[*4] レヴィンソンは次のように述べている。「この意味での倒錯(perversity)は不合理(irrationality)に似ており、一般的に不合理が批判されるのと同じように、多くの場合に批判の対象となりうる」(Levinson 2003: 30–31)。

げる結果につながるおそれがある。

3.3 道徳主義

道徳主義の特徴は、性的倒錯を道徳的概念によって規定するところにある。これまでに見たように、自然主義や完成主義においても、性的倒錯と道徳的悪ないし不正の間のつながりが示唆されることはあるが、生殖に関わらないセックスや相互人格的な性的認知を伴わない性的行為が直ちに、道徳的に問題があるとみなされるわけではない。これらの立場では、倒錯と道徳的悪ないし不正を架橋する何らかの追加的な前提が必要になる。これに対して、性的倒錯を徹頭徹尾、道徳的観点から説明するのが道徳主義である。結果、性的倒錯とみなされる事例はすべてある種の道徳的悪ないし不正である。ただし、そこで用いられる道徳の枠組みは論者によって異なるため、何らかの倫理的規範からの逸脱として捉えられる性的倒錯の内実は同じではない。ここでは代表的な道徳主義として、レヴィ（Levy 1980）によるロールズの道具立てを用いた説明、ビーゴン（Begon 2019）によるリベラリズム的説明、そして、バルツリー（Baltzly 2003）によるアリストテレス主義的説明をとりあげる。

まずレヴィ（Levy 1980）の主張するところでは、「倒錯」はある種の道徳的不正を非難する表現としてすでに流通しており、それ以外の使用目的（たとえば事実の記述）を求めるべきではない。レヴィのいう道徳的不正とは、生命・健康・自由・知性・愛といった、人間が人間らしく生きるために不可欠な「基本財（basic goods）」に対する侵害を指す。基本財の侵害は明白な道徳的不正である。だが、それが直ちに倒錯となるわけではない。基本財の侵害が倒錯として非難されるのは、その「動機が快楽である場合」（*ibid*.: 201）だ。より正確にいえば、基本財を毀損することと引き換えに喜びを得ることが倒錯なのではなく、基本財を毀損することに喜びを見出すことが倒錯である。そしてレヴィの考えでは、基本財の侵害に性的快楽を覚えることを非難する表現として、「性的倒錯」という言葉は一般に使用される。

基本財の侵害に快楽を覚えることを倒錯とするレヴィとは異なり、ビーゴン（Begon 2019）は自律性の尊重という道徳的規範からの逸脱それ自体に焦点を当てる。彼女によれば、重大な道徳的不正の一つは自律性の侵害であり、これまで性における不自然さと安直に結びつけられてきた「性的倒錯」という言葉はむしろ、「パートナーの性的自律性を尊重すべしという要請を無視し、阻害し、堕落させ、転覆させること」（*ibid*.: 358）を糾弾する表現として使用されるべきである。この言葉は実際に有害な行為だけでなく、パートナーを主体として尊重しない態度、そして他者の自律性を粉砕するような好みや欲求にも適用されるという。とりわけ、レイプ（被害者が心身の苦痛や社会的不利益を自覚していないケースを含む）は、相手の自律性を否定する典型的な性的倒錯（ただし、事例により倒錯の度合いは段階的）とされる。ビーゴンはこのように、性的マイノリティを抑圧する言葉として機能してきた経緯をもつ「性的倒錯」を再定義することにより、同性愛などへの不当な偏見を解体し、性に対するリベラルな見解を標榜する一方、他者の自律性を軽視する悪質な行為や態度を告発し非難するための強力な表現として「性的倒錯」を再利用することを訴える。

バルツリー（Baltzly 2003）もまた、性的倒錯を一過性の行為の問題ではなく、より持続的な内面的状態の問題として捉える。彼の考えでは、性的倒錯の概念は、アリストテレス主義的な「よき生（エウダイモニ

ア)」を中心とした道徳の枠組みを用いて説明可能である。ここでの「よき生」の基準は個人の主観的な幸福ではなく、情報に基づき合理的に行動する人々が、人間本性にしたがって追求したと考えた場合に収束すると期待される「人間性の開花」である。というのも、「人間は共通の人間本性を共有しており、その本性がこれ以上なく十分に発揮されたとすれば、その種の生をよく生きるとはどういうことかについて一致した構想へと人々を向かわせる」(*ibid.*: 8)からである。こうした考えのもとバルツリーは、性的倒錯を一度限りの行為ではなく、よき生の実現を阻害する性的な「傾向性(disposition)」として定義する。それによれば、ある性的傾向性が倒錯とみなされるのは、それが「より広範囲にわたる他の道徳的な悪徳が性の領域において表れたもの」(*ibid.*: 18)であるか、「そうした傾向性をもつことが、何らかの認められた道徳的な美徳を備えていることと心理的に両立不可能と考えられる」(*ibid.*)場合である。このように、倒錯は単なる私的な失敗ではなく、人間としての適切な機能を阻害しよき生の実現を妨げる道徳的欠陥とみなされる。

さてこのように、道徳主義のアプローチはいずれも、何らかの道徳的枠組みにもとづき性的倒錯を規定するが、そこで中心的な役割を果たす道徳的悪ないし不正についての考えは様々である。したがって道徳主義の内部では、性的倒錯を捉えるにあたりどのような道徳的概念に依拠することが適切であるかが問題となるだろう。だが、道徳主義の外部からみれば、性的倒錯を道徳的な観点から規定することの是非が問われるだろう。性的倒錯とはそもそも何らかの道徳的悪や不正だろうか。一般に倒錯とみなされる可能性のある性的行為や傾向性であって、あきらかに道徳的に問題があるとはいえないような事例(たとえば、異性装倒錯やラブドールなどの人工物や虚構のキャラクターを対象とする性的行為)は存在するように思われる。そしてまた、道徳的に大きな問題があるが、一般的には必ずしも倒錯とはみなされないような事例(たとえば、レイプや未成年との性的関係)も存在する。

とくに後者の事例についてはおそらく、性的倒錯であるかどうかにかかわらず、まずはその道徳的不正が問題にされるべきだろう。そして、仮に性における道徳的不正をさらに非難する何か強い表現が必要だとしても、多くの場合、「性暴力」などのすでに流通している比較的意味が明瞭な言葉で十分に対応可能かもしれない。ビーゴンはたしかに、単に有害な行為だけでなく、自律性を尊重しない態度や、自律性を否定するような好みや欲求を非難するためのレッテルがときに有用であることを論じた。しかし、害のない行為や実際にはなされなかったこと、あるいは単にアブノーマルな好みや欲求をもつことを、懲罰的に非難すべきだと考えることは過激であるようにも見え、すべてのリベラリストが賛同できる提案とはいえないように思われる。

3.4 無規範主義

規範主義はどの形態であれ、性に関する何らかの規範の存在を前提として、そこから逸脱する性的行為や性的傾向性を性的倒錯と分類する。これに対して無規範主義は、性的倒錯が意味をなすための特有の規範が存在することを疑う。それゆえ、そうした規範からの逸脱としての倒錯にも懐疑の目が向けられる。(ただし、あらゆる規範の存在が否定されるわけではない。性的倒錯を意味づける規範がいっさい存在しないとしても、性に関する道徳的規範はたしかに存在する。たとえば、レイプは倒錯ではないとしても道徳的不正であることは明白である。)無規範主義には、「性的倒錯」という言葉からそのネガティブな評

価的含みを除去したうえで、単に統計的にまれであることを示す記述的表現としてそれを受け入れるゴールドマン（Goldman 1977）と、その概念をもはや無用の遺物として捨て去ることを訴えるプリースト（Priest 1997）の見解が含まれる。

ゴールドマンによれば、性的欲求とは「他人の身体に触れることへの欲求、および、そのような接触が生み出す快楽への欲求」（Goldman 1977: 268）であり、性的行為とはそうした欲求に基づき、身体接触そのものを目的とする行為である。したがって、生殖や愛情表現といった他の目的の手段となることは、行為が性的であるための条件ではない。生殖や愛情を意図しないセックスを倒錯として非難する「手段・目的分析」は、性を他の目的の手段と見なす点で誤りを犯している。また、レイプが非難されるべきであるのは、それが暴力に他ならず、一般的な道徳上のルールに対する重大な違反だからであり、セックスそれ自体が固有の道徳的評価の対象となるわけではない。こうして、ゴールドマンは性に固有の規範の存在を否定し、その代わりに他者への危害の禁止や互恵性といった一般的な倫理を適用すべきだと論じる。彼によれば、性的倒錯は何らかの規範からの逸脱だとしても、「問題となる規範は単に統計的なもの」（*ibid.*: 284）にすぎず、少数派の性的実践という程度の記述的な意味しかもたないのである。

プリーストはさらにラディカルに、性的倒錯はもはやいかなる有用性もない概念であると主張する。「性的倒錯」は伝統的に、性に関する自然さからの逸脱という悪を非難する規範的な表現として用いられてきた。この背景には、性の機能は生殖を中心とする自然な目的と結びついており、避妊などの不自然な行為は不道徳であるという考えが存在した。だが、自然と道徳の一致を謳う、アリストテレス的な目的論は過去の遺物でしかない。ダーウィンの進化論は、生物の進化が純粋に因果的で無目的なプロセスであることを暴露した。したがって、性に関する自然な目的という考えも、そこからの逸脱としての性的倒錯という考えも、無目的な因果のネットワークとして自然を捉える近現代の世界観ではまったく意味をなさない。それゆえ、こうした時代錯誤の無用な概念は、「古い観念のゴミの山に追いやられるべき」（Priest 1997: 371）である、プリーストはそう宣告する。

ゴールドマンやプリーストの議論は少なくとも、性的行為や傾向性が倒錯であるかどうかは、何らかの客観的な規範にもとづき評価可能であるという前提に根本的な反省を迫る。セックスが何か普遍的な固有の目的や理念を有するという考えは、規範主義のなかでもとくに自然主義と完成主義に共通するが、それはけっして自明の前提ではない。また、倒錯であるかどうかは客観的な倫理的規範と独立であるとすれば、それを何らかの道徳的悪ないし不正と同一視する道徳主義の考えも根拠を失う。しかしだからといって、性的倒錯を可能にするいかなる規範も存在しないとはいえない。我々の考えでは、各主体にとっての合理性という観点から捉えられる、性的倒錯を意味づける最小限の規範は存在する。性に固有の普遍的で客観的な目的や理念、理想は存在しないとしても、我々が自らにとって豊かで幸せな人生を追求する以上、性にもその人生にふさわしい価値が付与される必要がある。合理的な主体としての我々に課される、この最小限の規範に反する性的行為や傾向性はやはり、何か重要な意味において倒錯であるように思われる。

4 二段階アプローチ

前節での批判的検討を踏まえ、本節では性的倒錯を考察するための新たな見通しを示す。そのためにまず指摘すべきことは、「倒錯」と呼びうる現象は、性的ではない領域にも広く認められるということだ。たとえば、ネーゲルは食に関する倒錯がありうることを示唆している[*5]。またすでに見たように、レヴィンソンの不合理としての倒錯という考えは、この概念がより広い適用範囲をもちうることを示している。さらには、道徳主義が考えるように、倒錯とは道徳的悪ないし不正だとすれば、それは性の領域に限定されず、様々な領域で普遍的に効力をもつ倫理的規範からの逸脱ということになるだろう。これらの観察から、「倒錯」が意味しうることについてどのようなことがいえるだろうか。

二つの可能性が考えられる。すなわち、(i)様々な領域に固有の規範が存在し、そこからの逸脱が各領域において倒錯とみなされるという可能性と、(ii)何らかの一般的な規範が異なる領域にまたがって存在し、そこからの逸脱としての倒錯がこれらの領域に共通して見いだされるという可能性である。(i)の場合、「倒錯」の概念は一義的とはいえないか、せいぜい何らかの規範からの逸脱を意味するにすぎず、「性的」や「食的」などの限定辞がない限り不完全な表現となる。他方、(ii)の場合、「倒錯」と呼ばれるすべての事例は、様々な領域での共通する規範からの逸脱と考えられ、この言葉はいかなる限定辞もなしにそれ自体で意味をなす。

規範主義のどの立場も、(i)か(ii)のいずれかにコミットすることになる。生殖や種の保存、そしてそのための生物学的な性の機能や目的に訴える自然主義の考えは、自然なセクシュアリティという性に固有の規範が存在することを前提とし、そこからの逸脱を性的倒錯とみなすため、どのような見解であれ(i)を是認することになるだろう。他方、道徳的悪ないし不正という観点から倒錯を規定する道徳主義においては、性に固有の規範というよりはむしろ、より普遍的な倫理的規範が性の領域において効力をもつと主張されており、「倒錯」を他の領域においてあえて異なる意味で用いるのではない限り、(ii)を含意することになるだろう。

無規範主義は性的倒錯を可能にするいかなる規範の存在も否定するのであるから、少なくとも性に関しては(i)にも(ii)にもコミットしない。ここで、ゴールドマンの考えを再びとりあげることは有益かもしれない。ゴールドマンによれば、性的欲求とは他人の身体に触れることへの欲求であり、性的行為とはそうした欲求にもとづく行為である。これは「性的」であることに関する近似的な定義として捉えるべきであり、正しい性的欲求とは何かを説明するものではない。この考えにしたがえば、他人の身体に触れたいという欲求を伴わない身体接触(たとえば、ラグビーのようなスポーツでの身体接触)はそもそも性的ではないか(Goldman 1977: 269)、実際の身体接触にはいたらないそうした欲求(たとえば、覗きや自慰に見られる欲求)は、基本となる性的欲求に寄生する代用的な欲求として「性的」と呼ばれる(*ibid.*: 270)。そして、統

[*5] 食に関する倒錯について、ネーゲルは次のように述べている。「紙や砂、木、綿などを好んで食べる人がいたとしても、我々はおそらくそのような食欲を倒錯したものとは考えない。それは単にかなり奇妙で不健康な好みであるにすぎず、倒錯について考えられているような心理的な複雑さを欠いている。…漏斗で喉に食べ物を流しこまれないと食べないとか、生きている動物しか食べないというような場合、その人を食に関して倒錯しているとみなすことは自然だろう」(Nagel 1969: 7)。

計的にまれな性的欲求にもとづく行為が性的倒錯とされる。ゴールドマンにとってはこのように、性的倒錯は規範の問題ではなく記述的な問題である。それゆえ、性的であることに関する大方の見方に合致しない欲求を、歪んだ性的欲求として捉える余地は残されていない。（性的であることに関する我々自身の見解については次節で、性的快楽の志向性という観点から集中的に論じる。）

（i）または（ii）の可能性に関して、我々の分類における完成主義から何が帰結するかは必ずしも明らかではない。完成主義の代表的論者とみなされるネーゲルは、ある箇所において次のように述べている。

> 倒錯の概念が何らかの意味において評価的でないことはほとんどありえない。なぜならそこには、倒錯がある点で達成することができなかった理想的なセクシュアリティ、少なくとも適切なセクシュアリティという考えが含まれているように見えるからだ。それゆえ、この概念が存立可能であるとすれば、よりよいセックス、あるいはよりよいセックスの適例が可能であることが含意され、人や実践、あるいは欲求が倒錯しているという判断は性に関する評価を構成することになるだろう。（Nagel 1969: 16）

ネーゲルはここで、自ら「理想的なセクシュアリティ」と命名する、性に固有の規範もしくは理念を想定しているように思われる。様々な性的実践を相互人格的な愛にもとづき評価するスクルートンも、この点では同じ方向を示唆している。他方、レヴィンソンが依拠する合理性は性に限定されない規範であり、彼が実際に挙げる倒錯の事例は、「宝のもち腐れ」と形容されるような何らかの不合理が疑われる一般的なケースである。とはいえ、彼の見解もまた、性的経験に関わる人間性の開花という理想を背景としており、その合理性の基準が性に限定されない十分に一般的なものであるかどうかは判断がむずかしい。

ところで、ネーゲルの想定する「理想的なセクシュアリティ」という観念は、どこか落ち着きの悪いものである。彼の論文は、しばしば引用される次の一節で締めくくられる。

> 結局のところ、たとえ倒錯したセックスがこの点においてそうでないセックスよりもよくないものだとしても、悪いセックスも一般的には何もないよりはよい。ここに議論の余地はないはずだ。他の重要な問題、たとえば、食物や音楽、文学、社会についても同様であるように思われる。環境に依存するのであれ、自らの気質に依存するのであれ、最終的には利用可能な選択肢のなかから選ぶより他にない。諸々の選択肢がかなり厳しいものでない限り、何も選ばないことが合理的になることはないのである。（*Ibid.*: 17）

倒錯したセックスもないよりはマシ、というのがネーゲルの結論のようだ。彼の考える相互人格的な性的認知の失敗としての倒錯はここで、選択の合理性に道を譲る。だとすれば、はじめから「理想的なセクシュアリティ」を個々の選択の問題と捉え、倒錯を主体の合理性の観点から直接的に特徴づけないのはなぜだろう。ネーゲルが擁護する相互人格的な性的認知や完成主義におけるその他どのような理想も、よいセックスの一つの側面であるにすぎず、そこにはおそらく選択の余地がある。そしてもしかすると（ネーゲルの考えに反して）、恋愛においてさえセックスを拒否することが合理的な場合もありうる。つまり、倒錯とはそ

れぞれの幸福追求におけるある種の不合理にほかならず、何が合理的であるかは主体自身やその外部の視点、そして状況に相対的であるかもしれない。

以後の議論において我々が目指すのは、よりリベラルな完成主義の構築である。ただし、ここで意図する完成主義は、主体自身の幸福を損なわないための合理性という規範にもとづき、「人間的なよい生き方」を外部からパターナリスティックに強制せず、個人の自律的な選択を重んじる穏健なものだ[*6]。そのために我々は、性に固有の目的や理想を想定することなく、より一般的な合理性の観点から一貫して倒錯を捉えることを試みる。この場合、性的倒錯の問題は二つの独立した要素に分割される。すなわち、「性的」であるとはいかなることかをめぐる記述的な問題と、倒錯の概念が前提とする規範の問題である。このように問題が切り分けられたなら、「性的倒錯」の規範性は「倒錯」に限定して議論され、「性的」であることの内実はそれと独立に考察されることになるだろう。この方針を便宜的に「二段階アプローチ」と呼ぶ。それにしたがうと、性的であることと性的ではないこと、そして、倒錯であることと倒錯ではないことが区別される一方、正しい性のあり方やそうではない性のあり方という考えはもはや意味をなさない。性的欲求や性的行為は倒錯となることもあるが、それはそうした欲求や行為が性的に正しくないからではない。というのも、性的であるかどうかは規範性を免れており、その正しさを問うことはカテゴリー・ミステイクだからである。規範の問題は、どのような欲求や行為が倒錯となりうるかという、より一般的な観点から考える必要がある。次節では、この二段階アプローチの最初のステップとして、性的であるとはいかなることかを検討する。

5 性的であるとはいかなることか

二段階アプローチのもと本節ではあらためて、性的であるとはいかなることかを問う。自然主義において性的であることは、生殖や種の保存、人間社会の維持および存続と深い関わりがあると考えられている。完成主義と道徳主義においてこの問題がどう捉えられているかはあまり明らかではないものの、セックスやその他の身体的接触を典型とする、性的行為の一般的理解を前提としているように思われる。そして、無規範主義の立場に立つゴールドマンによれば、性的欲求とは他人の身体に触れたいという欲求にほかならない。しかし、我々の見立てではこれらの考えはいずれも、性的であることの常識的見解を単にあてにしているか、せいぜいその一面しか捉えていない。もっとも、性的であることについての異論の余地のない必要十分条件を与えることは絶望的なほどむずかしいかもしれない。だがここでは少なくとも、この問題

[*6] 我々の考えでは、「リベラルな完成主義」はけっして撞着語法ではない。政治哲学においてはたしかに、リベラリズムと完成主義は相性がよくないとされる。だが、リベラリズムを個人の自律性（選択の自由）を最大限尊重すべきとする価値観として、また、完成主義を人間性の完成（よい生き方）を最大限追求すべきとする価値観として理解する限り、これらを組み合わせても語義矛盾ではない。選択の自由とよい生き方が対立することはある（後に論じるように、そこに倒錯的な事例が生じる余地がある）が、多くの場合これらは両立可能であり、我々は両者の実現を目指すべきだろう。国家や社会においてどちらの政策方針が優先されるべきかということや、そもそもそうした介入が必要かということはまた別の問題である。冒頭（第 1 節）で述べたように、ソロモンの証言にもとづく歴史的経緯から考えても、ネーゲルの完成主義がリベラルな思想を背景に展開されたと考えることはおそらく間違いではない。しかしながら、ネーゲルが人間一般の理想的なセクシュアリティ（人間的なよき性のあり方）を想定するのに対して、我々が提唱する完成主義はそうした理想を放棄する点において、古典的な考えとは大きく一線を画すだろう。

の核心に迫る足がかりを得ることを試みたい。

まず、「性的」と形容されるもっとも基礎的なレベルを定めよう。ここでは議論のため、ハルワニ（Halwani 2020）やマックイーン（McQueen 2021）をはじめとする論者が支持する、いわゆる「快楽説」が正しいことを仮定する[*7]。それによれば、性的快楽・欲求・行為のうち、もっとも基礎的なものは快楽である。そして、この性的快楽を出発点として、それに対する欲求として性的欲求が定義される。さらに、性的快楽をもたらす行為、もしくは性的欲求にもとづく行為として性的行為が捉えられる。ただし、性的快楽を基礎的とみなすことはあくまで、性的であるとはいかなることかを論じるための作業仮説にすぎず、快楽・欲求・行為の一般的な関係について、さらに踏み込んだ議論はここでは展開しない。仮に性的快楽よりも性的欲求や性的行為、その他の何かが先行するとすれば、そこを出発点として同様の考察が可能だと我々は考えている。

さて、どのような快楽が性的快楽なのか。我々の考えでは、性的快楽は少なくとも、次の二つの要件を満たさなければならない。すなわち、性的快楽とは、

（1）好ましいキャラクターとの交渉によって得られる、
（2）（最終的には性器を中心とする）特有のここちよい感覚である。

まず、(2)の「特有のここちよい感覚」について考えよう。我々の多くはおそらく、性にまつわるここちよい感覚がどのようなものかを、自らの体験を通じて（非認知的に）理解している。ただし、ここで想定される快感は、オーガズムの瞬間や性器への直接的な刺激に対する反応に限定されず、そこに至るまでの興奮や終わった後の余韻も含め、無理のない範囲で広く理解されねばならない。これに関連してマックイーン（*ibid*.: 452–453）は、たとえば首や耳といった、一見すると性的とはいえない部位に対して与えられた刺激でも、そこから性器を中心とする興奮が生じるならば、当の刺激それ自体を性的快楽とみなしてよいと論じている。性的であることに特有のここちよい感覚はこのように、時間的にも空間的にも一定の広がりをもつと考えるのがもっともらしい。

次に、(1)の条件の検討に移ろう。一見したところ、性的快楽を捉えるには特有のここちよい感覚だけで十分であり、この条件は不必要に思われるかもしれない。たとえば、ソーブルは次のように述べる。

> ごく大雑把にいって、一項的な枠組みを体現する一つの可能な理論は、次のように主張するだろう。すなわち、性的欲求とは特有のここちよい感覚を求める欲求（the desire for certain pleasurable sensations）にほかならず、性的活動とはこれらの感覚をもたらす活動である。（ここちよい感覚が性的であるかどうかを何が決めるかについてはわきにおいておこう。）（Soble 1980: 240）

[*7] ハルワニやマックイーンに先行する快楽説として、シャファー（Shaffer 1978: 186）やプリモラッツ（Primoratz 1999: 46）、アブラムソンとピンカートン（Abramson and Pinkerton 1995: 8）が挙げられる。とくにプリモラッツは、一見すると性的とはいえない部位で生じる性的快楽の可能性について詳しく論じており、その考えはハルワニやマックイーンに強い影響を与えている。

ここでソーブルが支持する「一項的な枠組み」とは、単独での性的活動（典型的にはマスターベーション）を基本として性を考えるモデルであり、二者間の性的活動（典型的にはセックス）をベースとする「二項的な枠組み」への対抗理論として提唱されている。つまり、ソーブルは次の二つのモデルを対置している。

【二項モデル（binary model）】
二者間（人と人）の活動を基本として性を考えるモデル。マスターベーションはそもそも性的活動ではないか二次的、または倒錯とみなされる。

【一項モデル（unitary model）】
特有の快楽（ここちよい感覚）をもたらす活動を中心に据えるモデル。マスターベーションから出発し、二者間の活動は前提とされない。

第三節で見たほとんどの立場は、二項モデルを前提としているように思われる。自然主義では人間の生殖、完成主義では相互人格的な性的認知、道徳主義では性的行為における他人への道徳的義務や配慮といったように、規範主義の立場はいずれも人と人との関係を基本として性を捉えている。無規範主義においても、ゴールドマンの場合、性的欲求とは他人の身体に触れたいという欲求であると規定される。

これに対して、一項モデルでは性的活動において他人との接触は必須ではなく、セックスはいわば「相互マスターベーション」のようなものとして派生的に理解される。実際、ソーブル（Soble 1980 and 2017）によれば、セックスと二人でなされるマスターベーションの境界はそれほど明確ではない。第一に、それらを物理的に区別することはむずかしい。挿入は同性愛のケースを考えるとセックスの必要条件とはいえず、別のことを空想しながら相手の身体を借りて快楽を得るようなケースを考えると十分条件ともいえない。第二に、意図の観点から相互マスターベーションとセックスを区別することにも限界がある。自身の快楽のみを意図する性的行為はマスターベーションである一方、相互に快楽を与えることを意図する行為はセックスであると述べることは一見有望に思われるかもしれない。しかし、一方にとってはセックスのつもりでも、他方にとってはマスターベーションにすぎないようなケースをどのように判断すべきかというのは悩ましい問題である。

一項モデルにはたしかにもっともらしい点がある。古今東西を問わず、他人との現実的な接触を伴わない多様な性的空想は数多く見られる。たとえば、春画は人々のそうした空想を記録する比較的最近の歴史資料だ。とくに注目すべきこととして、これらの春画のなかには、犬や牛をはじめとする動物、エイや蛸などの海洋生物、妖怪・幽霊・死者といった人ならざるものとの性的接触が数多く描かれていることを指摘したい。つまり、人間の性的空想は人と人との交渉を遥かに凌駕する。さらに現代社会においては、高品質のアニメーションやVR、アバターを介したメタバース空間での生活、生成AIやAIコンパニオンに代表されるデジタル・テクノロジーが、この傾向をさらに強化・増殖しているように見える。また、単なるイメージを超えて、動物やラブドールといった人ではない物理的対象との性的実践に関する興味深い報告（濱野2019 and 2025）もある。これらのことはおそらく、性的活動を人と人との間の身体的接触に限定して考える

ことはもっともらしくないことを示唆する。一般に性的と受けとられる多くの事例と比較すれば、他人との現実的な接触を伴うセックスはむしろ驚くほどまれといわざるをえない。

しかしながら、先の引用箇所においてソーブル自身も気づいている(「ここちよい感覚が性的であるかどうかを何が決めるかについてはわきにおいておこう」)ように、一項モデルには用語法上の大きな問題がある。なぜなら、マスターベーションが性的行為であることは多くの人々が認めるにせよ、セックス(sex)の概念をまったく前提としないならば、いかなる行為も性的(sexual)とみなすことはできないように思われるからだ。仮に一項モデルが真に検討に値する立場だとすれば、人と人とのセックスの概念を前提としない、より根本的な「性的」の意味を定める必要があるだろう。そして、我々が見るところ、これは単に用語法上の問題にとどまらない。これから論じるように、性的快楽はある重要な点においてここちよい感覚以上のものであり、両者を単純に同一視することはできないように思われる。

このことを示すため、二つの事例について考えたい。第一の事例として、納豆をかき混ぜる音を聞くと、どういうわけか興奮し勃起してしまう A 氏がいたとする。ただしこのとき、特定の対象との身体的交渉はいっさい想起されていないとしよう。A 氏はその音を聞き、性器を刺激することであのここちよい感覚を得て、しばしば射精に至る。さて、A 氏が得るこの感覚は性的快楽といえるだろうか。たしかに、それは快楽ではあるかもしれない。しかし、はたして性的快楽といえるだろうか。ここで注意すべきことは、性器を中心とする快楽がすべて性的であるとは限らないということだ。たとえば、排泄により得られる快楽は通常は性的とみなされないだろう。もっとも、排泄の快楽とあのここちよさは質的に異なるとはいえるかもしれない。だが、両者が異なる感覚であることが直ちに、後者を性的なものにするわけではない[*8]。

第二の事例として、レイプ被害のケースを考える。いうまでもなく、レイプの被害者は加害者との肉体的接触を強く拒否している。加害者から与えられる刺激に身体が反応し、被害者がたとえオーガズムに達したとしても、その感覚は性的快楽ではないはずだ。第一の事例とは異なり、ここで問題になるのはその感覚が性的であるかどうかではない。この事例が示しているのはむしろ、望まない相手によってもたらされた「特有の感覚」は、快楽ではなく不快感として現れるということだ。つまり、同じ感覚に対する評価が肯定的になるか否定的になるかは、それが誰(何)によってもたらされたかが大きく影響するのである[*9]。

これまでの議論を通じて、三つのことが明らかとなった。第一に、性的快楽は他人との現実的な接触(セックス)によってもたらされる必要はないという点で、ソーブルが支持する一項モデルはもっともらしい。

[*8] A 氏が仮に「好ましいキャラクターとの交渉によって得られる特有のここちよい感覚」が何であるかをすでに知っているとすれば、その質的類似性から、納豆をかき混ぜる音によって掻きたてられる興奮が性的であることを直ちに察知するかもしれない。しかし、先行するそのような経験がない場合、A 氏が感じる興奮や快楽が性的といえるかは A 氏自身にとってさえ定かではないだろう。

[*9] このことが示唆するのは、「ここちよい感覚」のここちよさは実のところ、好ましいキャラクターによって引き起こされたものでなければならないということではないだろうか。だとすれば、ソーブルが性的快楽をここちよい感覚によって同定しようとするとき、好ましいキャラクターの存在が暗に前提とされており、性的快楽の条件(2)は(1)を内包するように思われる。いずれにせよ、好ましくないキャラクターによって引き起こされた感覚はどのようなものであれここちよくはないのだから、それは性的快楽ではありえない。ところで我々の作業仮説では、性的行為は性的快楽を基礎とする。それゆえ、レイプの被害者が性的快楽ではなく不快感や苦痛に襲われるということは、当人の視点から見る限り、いかなる性的行為にも従事していないことを意味する。

第二に、性的快楽を特有のここちよい感覚と同一視する点で、一項モデルは誤っている。第三に、性的快楽は何か他の対象との（少なくともイマジナリーな）交渉を伴う必要があるが、それは二項モデルが想定するような、肉体をもつ現実の他人であるとは限らない。そのような対象を我々は「キャラクター」と命名する。キャラクターには最低限、単なるモノとは区別される、自律的な特徴や性格が何らかの形で想定（または投影）される必要がある。それゆえ、実在する人間はもちろんキャラクターであることの条件を満たすが、ヒトではない動物、ドール、漫画やアニメにおける登場人物、デジタル・イメージ、アバター、ポルノスター、記憶上の誰か、架空の存在者なども、（現実的・具体的・物理的であるかどうかにかかわらず）すべてキャラクターとなりうる。

我々の考えでは、性的快楽とは概ね、(i)好まれるキャラクターとの（想像上または現実の）交渉によって得られる、(ii)（最終的には性器を中心とする）特有のここちよい感覚である。これに対して、次のような疑問が生じるかもしれない。身体の一部や衣服に対するフェティシズムは、キャラクターが必要であることの反例になるのではないか。だがしかし、いかなるキャラクターとも結びつかない身体の部位や衣服が、性的快楽や欲求をもたらすことなど本当に可能だろうか。誰の部分でもない手や脚、誰が身につけるものでもない下着や靴に対する愛着は性的といえるだろうか。手や脚に興奮を覚える人々はおそらく、それを通じて漠然とした誰かを想起しているのではないか。不完全な特徴や性格しかもたない誰かであるとしても、それがキャラクターであることに変わりはない。また、誰が身につけるものでもない下着や靴に対する執着はおそらく、性的な趣味というよりはむしろ特殊な収集癖とみなすべきではないだろうか。フェティシズムが性的である限り、その背後にはやはり何らかのキャラクターが想定されているように思われる。

6 主体の合理性と倒錯

前節では、性的倒錯の「性的」の意味について論じた。本節では性に限定されない一般的な観点から、「倒錯」をめぐる規範の問題の検討を行う。我々がここで探ろうと思う倒錯の概念は、自然主義における自然なセクシュアリティという規範からの逸脱ではない。また、道徳主義における道徳的悪ないし不正としての倒錯という考えとも異なる。さらには、何らかの理想的なセクシュアリティを想定し、そこからの逸脱として倒錯を意味づける、従来の完成主義の考えとも同じではない。我々が着目するのはむしろ、ネーゲルが最終的に立ち返り、レヴィンソンが十分に捉えることができなかった、もっとも根底的なレベルでの規範である。すなわち、様々な状況に条件づけられた個々人が自己の幸福を追求するうえでの合理性という規範であり、そこからの逸脱としての倒錯である。以下、順に説明する。

まず、主体に課される合理性の一般的要請を概ね次のように理解する。

【主体の合理性】
合理的な主体は自己の利益と幸福を可能な限り追求すべきである。

この指針に沿う行いは合理的であり、そうでなければ、明確に不合理であるか、合理的とも不合理ともい

えない。ただし、衣食住をはじめとする基本的な福利を除き、「自己の利益と幸福」が何を意味するかは、主体ごとに大きく異なるかもしれず（性についてはとくにそうかもしれない）、これに関していかなる客観的な基準も前提としない。（とはいえ、主体が見出す人生の利益と幸福に対する、一般的な評価は可能かもしれない。また、そうした評価にもとづいて、主体が自らの利益と幸福を再解釈することはありうる。しかし、自己の利益と幸福を最終的に享受するのは主体自身である。）

次に注意したいのは、主体の合理性と道徳性はさしあたり次元の異なる問題であるということだ。第一に、合理的な主体は自己の利益と幸福を可能な限り追求すべきだという要請は、道徳理論を構築するための重要な前提の一つではあるものの、それ自体はしたがうべき道徳上の原理というわけではない。つまり、自己の利益と幸福を不十分にしか追求しなかったり、自己の利益と幸福に反する結果になったりしたとしても、必ずしも道徳的に瑕疵があるとはいえない。第二に、道徳的な行いが必ずしも合理的であるわけではなく、不道徳な行いが不合理であるとも限らない。（ただし後に見るように、重大な不道徳は主体の長期的な利益と幸福を毀損する傾向があるため、往々にして不合理となる可能性も高い。）もっとも、道徳的であることが主体の利益や幸福を構成する重要な要素であるとすれば、合理的な主体はまた道徳的でもあるだろう。だがその場合でも、道徳的に許容される行いのすべてが合理的であるとは限らない。

次に、主体の利益と幸福に性がどのように関わるかを検討しよう。性は多くの人々にとっておそらく、人生のすべてではないにせよ、それを構成する重要な要素の一つだろう。このことを念頭に、性に関する合理性を次のように考えることができる。（この合理性の概念は性に限らず、必要な変更を加えれば、他の種類の利益と幸福にも当てはまるだろう。）

【性に関する主体の合理性】
各主体は自己の人生全体またはその重要な部分の利益と幸福を考慮したうえで、それに寄与しうる性的な利益と幸福（広義の性的快楽）を可能な限り追求すべきである。

もっとも単純なケースでは、個々の利益と幸福の総和は人生全体の利益と幸福に等しい。しかし現実的には、個別的な利益と幸福の追求が限定的または一時的にどれほど合理的に見えたとしても、人生全体またはその重要な部分にほとんど寄与しないか、それに反することさえあり、この場合そうした行いは合理的とはいえない。そしてまた、「人生の重要な部分」の範囲は主体の関心や文脈に応じて可変的であり、人生全体の利益と幸福は生涯を終えるそのときまで主体にとってさえ不確定である。さらには、性の価値やその人生への貢献に関して、万人に共通する普遍的な見方は存在しないかもしれない。それゆえ、理想的なセクシュアリティを想定しない以上、どのような性的快楽がどのように人生に寄与するかについて、誰にでも当てはまる普遍的な原理が存在すると期待すべきではない[*10]。

[*10] 人生の特定の期間を切りとった場合に不合理に見える利益と幸福の追求が、より大きな人生の観点から後に振り返ったとき、必ずしも不合理ではないことはありうる。だが、その逆も起こりうる。ここには、人生の利益と幸福をめぐる部分と全体のダイナミックな関係や、そこでときに生じうる運の問題が絡んでいる。これらを論じることは本論文の扱う範囲を超える。

主体に課される合理性についてのこのような考察にもとづき、「倒錯」をその否定として捉える可能性が開かれる。だが、合理的でないことは不合理であることを直ちには意味しない。そして、不合理にも程度の違いがあるように思われる。そこでまず、性に関して合理的でも不合理でもない行為を次のように特徴づける。

【性的無為】
ある性的行為が無為であるというのは、性的快楽を限定的または一時的にもたらすものの、自己の人生全体またはその重要な部分の利益と幸福に大きく反することもなければ寄与することもないような行為であることを意味する[*11]。

人生全体の利益と幸福が一時的な快楽を加算することによって決定される単純なケースでは、わずかな快楽も人生にとって何らかの意味をもち、いかなる性的快楽の追求も無為ではありえない。しかし、そのような単純化がむずかしい現実のケースでは、完全に無為であるような性的行為は合理的とも不合理ともいえない。

次に、軽度の不合理としての「性的偏屈」を次のように特徴づける。

【性的偏屈】
ある性的行為が偏屈であるというのは、自己の人生全体またはその重要な部分の利益と幸福につながる性的快楽が追求可能であるにもかかわらず、そうした快楽の追求を阻害するか、不十分な追求にとどまる行為であることを意味する。

性的偏屈の概念はあくまで自己の利益と幸福に関わり、人間的な性の普遍的価値や目的(たとえば、「人間社会の維持と存続」、「双方の人格的充実」や「人間性の開花」)を前提としていない。この重要な点を除けば、性的偏屈はレヴィンソンの「性に関する不合理」に概ね対応する。それに対して、重度の不合理である「性的倒錯」は次のように特徴づけられる。

【性的倒錯】
ある性的行為が倒錯であるというのは、性的快楽を限定的または一時的にもたらすものの、自己の人生全体またはその重要な部分の利益と幸福に著しく反するような行為であることを意味する。

合理性からの逸脱には程度の違いがあり、我々の考えでは、性に関して少なくとも無為・偏屈・倒錯を区別する必要がある。

さて、これらの合理性からの逸脱について次のことを忘れてはならない。無為・偏屈・倒錯が成立するかどうかは、(i)主体の内的観点をとるか外部(二人称および三人称)の観点をとるかで変わりうること、ま

[*11] ここでの「無為」の意味は何もしないことではなく、「無為にすごす」といった慣用表現での使用に依拠している。

た(ii)主体が置かれた社会・文化的状況に依存すること、したがって、(iii)あるタイプの性的実践が一律に合理性からの逸脱であるとはいえないが、(iv)無為・偏屈・倒錯と呼びうる個別事例がどうしてそうであるかは、合理性の逸脱という観点から一貫した説明が可能ということである[*12]。多くの社会や文化において倒錯とみなされるような性的実践(たとえば、ドール愛好)も、自己欺瞞なく満足な生活の一部と認めうるならば、我々の基準にしたがう限り、当人にとっては無為・偏屈・倒錯のいずれにも当たらない。他方、一般的には倒錯とみなされない性的実践(たとえば、マスターベーション)であっても、当人にとって不合理となるような状況が考えられるかもしれない。要するに、合理性の評価はとるべき観点や直面する状況に左右されるため、どのような性的実践が無為・偏屈・倒錯と判定されるかはけっして固定的ではないのである。

ここで理解を促すため、いくつかの性的実践をさらに詳細に検討してみたい。これらの事例を検討する目的は、日常的な偏見や外部からの性の理想を自明視せず、各主体の合理的な幸福の追求という一貫した理論的観点から、一般にアブノーマルとされる様々な性的実践が本当に倒錯に当たるかどうかを判断することの意義を示すことにある。以下に見るように、我々の判断は常識と大きく乖離することはないように思われる一方、そうした乖離が見られるケースにおいては、常識のうちに倒錯と他の概念(たとえば倫理的規範)との混同が見られたり、少数派の性的実践に対する偏見や嫌悪感が紛れていたりすることが明らかになるかもしれない。

- マスターベーション

全体の利益と幸福が享受される快楽の総和によって決定されることを前提とするならば、限定的かつ一時的な快楽を得るマスターベーションはけっして性的無為ではないだろう。だがこの前提が成り立たないような状況では、マスターベーションは必ずしも合理的ではなく不合理になることもある。たとえば、恋人やパートナーとの性的関係がより重視されるような状況において、それでもマスターベーションから性的快楽を得ることは性的偏屈または倒錯となるおそれがある。もっとも、性的関係の維持とマスターベーションによる性的快楽の享受は両立することも可能であり、その場合には不合理を免れる。

- 人ならざるものとの性愛

人と人の間で行われるものとしてセックスをとらえる限り、虚構のキャラクターやドールとの性的行為はセックスであるとはいえない。そうした行為はむしろ、ある種のマスターベーションとみなされることになるだろう。そしてこの場合、先に指摘したことの大部分が、人ならざるものとの性愛についても当てはま

[*12] ここで(i)に関して指摘したのは、主体にとって何が幸福であるか(したがって、何を行うことがその主体にとって合理的か)という判断は、主体自身とその外部で評価が食い違うこともあるということだ。(「ゴッホの人生は幸福だったか」という問いに対する一致した見解は存在せず、ゴッホ自身の考えも大方の評価とは異なるかもしれない。)また(ii)で述べているのは、現代的な自然主義者が示唆するように、倒錯であるかどうかは当人の行いによって完全に決まるものではないということだ。ただし、グレイやルディックが考えるように、人間社会のあり方に完全に左右される集団的な問題(「組織的で安定した社会の形成と維持」に寄与するか否かという問題)というわけでもない。倒錯であるかどうかは基本的に、与えられた状況で主体が何を選択することが合理的かに依存するのである。

る。たとえば、人であるパートナーとの性的関係が重視される状況では、虚構のキャラクターやドールとの性愛を優先することは性的偏屈または倒錯となりうる。もっとも、人ならざるものとの性愛それ自体に価値を見出す主体(濱野 2025)に対しては、このような不合理を指摘することはむずかしいかもしれない。だが、主体自身が現実の人との豊かな性的関係を求め、かつそのような関係が追求可能であるにもかかわらず、人ならざるものとの交渉によってそれを代用するようなケースについては、性的倒錯とはいえないまでも偏屈となりうる。

● フェティシズム

特定の身体の部位やモノ、状況といった非人格的対象への偏愛や執着を意味するフェティシズムは、しばしば性的倒錯の典型とみなされる。だがすでに示唆したように、誰の部分でもない手や脚、誰が身につけるものでもない下着や靴に対する執着は性的であるようには見えず、フェティシズムがある種の性的嗜好であるとすれば、他の性的欲求と同様、その背後には何らかのキャラクターが関与しなければならないように思われる。それゆえ、フェティシズムは必ずしも理解しがたい特殊な趣味ではなく、直ちに不合理というわけでもない。ただし、非人格的対象へのこだわりが何よりも優先される場合、それは偏屈または倒錯となるおそれがある。というのも、特定の身体的特徴(たとえば、きれいな脚)をもつキャラクターに惹かれるということと、そうした特徴をもつキャラクターにしか性的関心を抱くことができないということの間には大きな違いがあるからだ。そして、前者よりも後者のほうが偏屈や倒錯に陥る可能性は高い。とりわけ、非人格的対象へのこだわりが強すぎるため、人格全体との望ましい性的関係を構築することに大きな支障をきたすならば、フェティシズムは当人にとって不合理であり倒錯となりうる。

● 同性愛

同性愛が異性愛と同等に認められている社会では、同性愛がそれ自体で性的偏屈や倒錯となることはない。いいかえれば、同性愛が不合理となるケースは、異性愛がそうであるようなケースと基本的にパラレルである。同性愛であれ異性愛であれ、追求可能な自己の利益と幸福を追求しないことの方がむしろ不合理といえる。他方、同性愛がタブー視されるような社会では、そのような性的実践は偏見や処罰の対象となるゆえに倒錯となる可能性が高い。ただし、この場合の不合理は個人に起因するのではなく、倒錯を構成する要因はもっぱら社会からの抑圧である。(同性愛を道徳的悪ないし不正とみなす客観的根拠を、我々は考えることができない。)何が不合理な選択となるかは単に個人の問題ではなく、当人の欲求や理想、社会や時代背景、自らが置かれた状況など複数の変数によって決まる。

● サディズムとマゾヒズム

サディズムとマゾヒズムの実践が本当に、相互人格的な性的認知や人間性の開花を阻むものであるかどうかについては議論の余地がある。また、そうした実践から得られる性的快楽が常に限定的かつ一時的で、全体としての人生またはその重要な部分の利益と幸福にまったく寄与しないということも明ら

かではない。サディズムとマゾヒズムの実践のなかにはたしかに、道徳的に問題のある事例が含まれるかもしれない。また、道徳的に問題がないにせよ、合理的とはいえない事例が含まれるかもしれない。にもかかわらず、人生全体やその重要な部分の利益と幸福に寄与しうる実例がないともいいきれない。

● 窃視症・露出症・窃触症

窃視症・露出症・窃触症は少なくとも我が国において、相手の同意なしに行為に移された場合には処罰の対象となる。つまり、そのような行為は倒錯である以前に犯罪である。そして、それらは単に犯罪であるだけでなく、(いかなる倫理学説のもとでも)道徳的に有害な行為とみなされるだろう。犯罪や道徳的に有害な行為が人生全体やその重要な部分の利益と幸福に寄与することがない限り、窃視症・露出症・窃触症が合理的となることはない。さらに強くいえば、そのような行為は一般に人生全体の利益と幸福に反するはずであり、重度の不合理に陥ることを免れない。それゆえ、犯罪や道徳的に有害な性的行為がすなわち性的倒錯というわけではないが、それらが結果的に倒錯となることは間違いない。もっとも、これらの性的嗜好が空想の段階にとどまるならば、犯罪ではなく道徳的に有害だとも断定できない。それでも、この種の性癖を抱えることによって、本人や他人に何らかの苦痛や困難(精神的葛藤や対人関係の悪化など)が生じる場合、それは克服されるべき「障害」(パラフィリア)となりうる。このような障害は倒錯だろうか。そうであるようにも見える。だが実際には、本人にはどうしようない障害によって引き起こされた倒錯というべきだろう。だとすれば、他の疾病と同様、その障害の根本的解決には専門家の支援が必要である[*13]。

● 小児性愛

小児性愛は世界的に見ても重罪であり、パラフィリアの一つと分類される。それゆえ、このケースについても前項で述べたことの大部分が当てはまる。ただし、小児性愛についてはとりわけ、性的欲求が向けられる対象に関して、窃視症・露出症・窃触症とは別の倫理上の問題を指摘することができる。子どもは一般に真の同意能力をもたないため、いかなる性的行為も本質的に有害であると考えられている。法律の目的はこうした有害な行為を防止し、子どもの健全な成長と福祉を保護することにある。しかしながら、恋愛の相手がたまたま未成年であるようなケースとは異なり、子どもの心身の未熟さゆえに性的興奮を覚える小児性愛については、欲求それ自体に関してより深刻な倫理的懸念が生じるように思われる。事実、小児性愛にまつわる空想を消費することさえ社会的に大きな問題があるとみなされており、厳しい法的規制が課されている。(ただし、成人の間で繰り広げられる「ロールプレイ」には

[*13] 精神医学における「性的倒錯(パラフィリア)」は、医学的に評価可能な基準にもとづき精神疾患と診断される、持続的で反復的な性的嗜好の総称と理解される。これはさしあたり、我々の考察の対象である「性的倒錯(セクシャル・パーバージョン)」とは区別すべき概念である。だが、両者は重なる部分も大きい。異なる状況ではパラフィリアと診断される可能性のある諸症状が、当人とその周りにとってほとんど無害である場合、必ずしもパーバージョンであるとはいえない。(そしておそらく、パラフィリアと診断される必要もない。)しかし、当人およびその周りに有害とみなされるパラフィリアは、パーバージョンとなる可能性が非常に高い。

そのような有害さはない。）それゆえ、こうした性的欲求をもつこと自体が倒錯を帰結する可能性が高い。小児性愛をめぐる様々な懸念を論じることは我々の目的ではないが、そこに大きな問題があることは誰も否定することはできない。多くの場合、どのような欲求にとらわれるかに関しては自己制御をほとんど期待することはできないので、問題のある欲求が抑えがたいほどになる場合、やはり専門家の支援を仰ぐ必要があるだろう。

- 動物性愛

多くの国々において動物との性的行為は虐待とみなされ、動物保護の観点から禁止されている。（ただし、我が国の法律において明示的な規定はない。）倫理的観点から見ると、動物性愛と小児性愛には共通する懸念があるように思われる。子どもの未熟さゆえに性的興奮を覚えることと、動物の未熟さゆえに性的興奮を覚えることには、何か共通する問題があるように感じられるのである。だが、動物に対する性的欲求は必ずしも、その未熟さゆえに生じるものではないかもしれない。動物との対等な性的関係ははたして可能だろうか。可能であることを示唆する報告（濱野 2019）もある。だがその一方、動物たちの証言を得ることは小児性愛のケースよりもさらにむずかしく、これについて決定的な判断を下すことはできない。現状において動物性愛には実践上大きな問題があると考えられるため、そうした性的快楽を追求することが合理的であるとはいいがたい。

- 性的活動の中断と放棄

人生全体またはその重要な部分の利益と幸福のために、性的活動を一時的または完全に放棄することは合理的でありうる。つまり、それは性的無為・偏屈・倒錯ではない。実際、人生を賭する重大なプロジェクトのために一時的に性的活動を中断することはあるだろうし、職務上そうした活動を完全に放棄しなければならない人々も存在する。だが、人生における他の活動と両立可能な場合でさえ、性的快楽の追求が常にプラスに作用するわけではない。人間関係における性的ではない側面を重視するため、性的な接触をあえて避けることは不合理ではない。このような場合、束の間の性的快楽を追求することはむしろ合理的とはいえない。さらには恋愛関係においてさえ、セックスが最上の愛情表現であるとも限らない。セックスは必ずしも真の恋愛の自然な帰結であるとは限らず、両者の結びつきは一般に考えられているほど堅固ではないかもしれない。

これらの事例において性的無為・偏屈・倒錯は、性に関する道徳的悪ないし不正、社会的罪、パラフィリア、少数性などの他の分類と重なって存在している。性的倒錯をめぐる多くの混乱の元凶はここにあるように思われる。いずれにせよ、問題の所在を明確にすることが重要である。たとえば、サディズムとマゾヒズムの実践のうち明白な人権侵害が疑われるようなケースは、それが倒錯であろうとなかろうと、第一には道徳的不正として問題化されるべきだろう。他の分類についても同様である。

以上の考察を経て我々は、冒頭に提示した問いについて一定の回答を得ることができたのではないかと思う。性に関する不合理、あるいは合理性の欠如の事例は実際に存在し、それゆえ、性的無為・偏屈・

倒錯は有意味な（それゆえ維持可能な）概念として使用することができる。だがここでさらに、「倒錯」のような侮蔑的な言葉を保持するべきかと問われるかもしれない。最後にこの点についても、必要かつ可能な範囲で検討したい。第一に、単なる不合理や合理性の欠如ではなく、無為・偏屈・倒錯の概念が必要になるのは、そこには様々な要因が絡む複雑なメカニズムが作用しているように思われるからだ。これらの概念はおそらく、意志の弱さ（アクラシア）や自己欺瞞と並ぶ、しかしそれらとは区別される不合理、あるいは合理性の欠如と関係している。たとえば、意志の弱さの諸事例は（性に限定されない）偏屈と倒錯のどこかに位置づけられるが、この間で様々な程度の差が認められるだろう。また、偏屈と倒錯は自己欺瞞の形をとって現れることもあるが、必ずしもそうとは限らない（自覚的な偏屈と倒錯のケースが存在する）ように思われる。

第二に、本論文で提示した倒錯の概念はリベラリズムの観点からも支持されるだろう。ビーゴンらの道徳主義者もまたリベラリズムの理念のもと、「性的倒錯」の社会的スティグマとしての機能を、人権侵害を告発するために逆利用すべきだと主張する。こうした概念工学的アプローチは、これまで性的マイノリティの差別に用いられてきた「性的倒錯」という言葉を、あえて保持するための積極的な理由を提供するだろう。しかしすでに指摘したように、実際に有害な行為の他に、そうした行為を単に連想する好みや欲求にまでそれを適用することに対して、リベラリズムの内部でも抵抗があるにちがいない。我々のアプローチは、ビーゴンらとは対照的なリベラリズムのあり方を示唆する。倒錯の概念をリベラリストの目的のために改訂するのではなく、ある種の不合理性として拡張的に明晰化することで、この言葉の否定的なニュアンスを換骨奪胎することがその趣旨である。

「性的倒錯」がもっぱら、他者（とくに性的マイノリティ）に対する嫌悪表現（日本語における「変態」のような）として機能してきたとすれば、それを逆利用するという提案はこれを保持するもっともな根拠となるだろう。だが、性的倒錯はおそらく自分自身に適用することも可能な概念であり、（まれではあるが）他の何かを侮蔑的な含みなしに評価する際に用いられることさえある。たとえば、ある種の文学や芸術は倒錯的と評価されることもあるが、そこに作品の価値を貶める意図はない。もっとも、「性的倒錯」が外部の視点から使用される多くのケースでは、それは厳しい非難という形をとって現れるだろう。しかし、自分の行為が倒錯であるかどうかを自問することや、この概念をもとに外部からどう見えるかを推測することは十分に可能であるように思われる。これらのことから、「性的倒錯」が単なる感情表出や非難のシグナルではなく、何らかの概念的なコアを有することが示唆される。すでに論じたように、一時的な性的快楽を追い求めたために人生の破滅に陥ることを性的倒錯と呼ぶことはそれほど奇妙ではない。日本語における「倒錯」が逆さまになることを意味することを考えると、この用法はむしろ自然ともいえるだろう。

7 おわりに：性的快楽と人生におけるその重要性

性的倒錯はいかにして可能かという問いのもと、新たな理論的枠組みの提示を試みた。我々はまず、先行研究を「規範主義」（自然主義・完成主義・道徳主義）と「無規範主義」に分類し、それぞれの問題点を指摘した。これらの批判的検討を通じて「二段階アプローチ」の可能性を示唆し、性的であることをめぐ

る記述的な問題と、倒錯に関する規範の問題に切り分けた。前者については、性的快楽を「好まれるキャラクターとの交渉によって得られる特有のここちよい感覚」として特徴づけ、性的であることは何らかの対象（人間ではない動物や架空の人物、ラブドールなどを含む）を必要とすることを論じた。後者については、倒錯を道徳的な規範や何らかの理想的なセクシュアリティからの逸脱と捉えるのではなく、「個人の利益と幸福の追求における合理性からの逸脱」として理解することを試みた。この観点から、性的無為を合理的でも不合理でもない行為、性的偏屈を軽度の不合理、性的倒錯を重度の不合理として区分したうえで、マスターベーション、同性愛、サディズムとマゾヒズム、小児性愛などのケースについて考察した。本稿の試みが一定の妥当性をもちうるとすれば、性的倒錯を意味づける規範に関するよりリベラルな見方が可能である。

この議論を通じて明らかになったのは、性的快楽が人生においてもちうるその重要性である。性的快楽それ自体は、キャラクターとの交渉によって得られるここちよい感覚以上のものではない。しかし、一定の社会・道徳的制約のもと、自らの人生のなかにそれをどのように位置づけるかに応じて、よりよい人生のあり方に寄与することもあれば、そうはならないこともある。繰り返しになるが、どのような快楽であれ、単にその総和が人生全体の利益と幸福を決定するわけではない。我々はそれぞれ目指すべき人生のあり方にしたがって性的快楽を位置づける必要がある一方、それをどのように位置づけるかが人生のあり方を決める。我々の多くにとって、この往還は不可避である。性的無為・偏屈・倒錯が問題となるのは、個々人にとってのよい生き方と性的快楽の自由な追求の間に看過しがたい齟齬が生じる場合なのだ。

謝辞

本稿は、2022 年 5 月 29 日に開催された応用哲学会第 14 回年次研究大会での発表「「性的倒錯」はいかにして可能か」、2025 年 9 月 6 日に開催された応用哲学会第 17 回年次研究大会での発表「「性的倒錯」に対するもう一つのアプローチ：性と（非）合理性の問題」、および性愛に関する研究プロジェクト定例会での複数回の研究報告にもとづく。定例研究会のメンバーや学会発表の参加者から、多くの有益な質問や指摘をいただいた。また、本誌の匿名査読者 2 名からは、我々が見落としていた重要な論点についての的確なレビューと、改善のための多くの建設的なコメントをいただいた。ここに記して深く感謝を申し上げたい。なお本稿は、JSPS 科研費（萌芽）「性愛をめぐる人間学の試み」（課題番号：22K18460、代表：土屋貴志）の研究成果の一部である。

参照文献

[1] Abramson, P. R., and Pinkerton, S. D. 1995. *With pleasure: Thoughts on nature of human sexuality*. Oxford University Press.

[2] Baltzly, D. 2003. “Peripatetic Perversions: A Neo-Aristotelian Account of the Nature of Sexual Perversion”, *The Monist* 85: 3―29.

[3] Begon, J. 2019. “Sexual Perversion: A Liberal Account”, *Journal of Social Philosophy* 50: 341−362.
[4] Gray, R. 1978. “Sex and Sexual Perversion”, *Journal of Philosophy* 75: 189−199.
[5] Goldman, A. 1977. “Plain Sex”, *Philosophy and Public Affairs* 6: 267−287.
[6] Halwani, R. 2018. *Philosophy of Love, Sex, and Marriage* (second edition), New York: Routledge. [R・ハルワニ,『愛・セックス・結婚の哲学』, 江口聡／岡本慎平ほか(訳), 名古屋大学出版会 , 2024年.]
[7] Halwani, R. 2020. “The Sexual Pleasure View of Sexual Desire.” *Philosophical Papers*, 49: 107−135.
[8] Levinson, J. 2003. “Sexual Perversity”, *The Monist* 86: 30−54.
[9] Levy, D. 1980. “Perversion and the Unnatural as Moral Categories”, *Ethics* 90: 191−202.
[10] McQueen, P. 2021. “Sexual Interactions and Sexual Infidelity”, *Journal of Ethics* 25: 449−466.
[11] Nagel, T. 1969. “Sexual Perversion”, *Journal of Philosophy* 66: 5−17.
[12] Nagel, T. 1979. *Mortal Questions*, Cambridge: Cambridge University Press, 39−52. [T・ネーゲル,『コウモリであるとはどのようなことか』, 永井均(訳), 勁草書房, 1989 年.]
[13] Priest, G. 1997. “Sexual Perversion”, *Australasian Journal of Philosophy* 75: 360−372.
[14] Primoratz, I. 1999. *Ethics and Sex*, London: Routledge.
[15] Ruddick, S. 1975. “Better Sex”, in R. Baker & F. Elliston (eds.), *Philosophy and Sex*, New York: Prometheus Books.
[16] Scruton, R. 1986. *Sexual Desire: A Moral Philosophy of the Erotic*, New York: Free Press. Reprinted as *Sexual Desire: A Philosophical Investigation* (2006), London: Continuum.
[17] Shaffer, J. A. 1978. “Sexual Desire”, *Journal of Philosophy* 75: 175−189.
[18] Soble, A. 1980. “Masturbation”, *Pacific Philosophical Quarterly* 61: 233−244.
[19] Soble, A. 2017. “An Essay on Masturbation”, in R. Halwani, A. Soble, S. Hoffman, and J. M. Held (eds.), *The Philosophy of Sex* (7th edition), London: Rowman & Littlefield, 103−117.
[20] Solomon, R. 1974. “Sexual Paradigms”, *Journal of Philosophy* 71: 336−345.
[21] トマス・アクィナス. 1991.『神学大全』(第 22 冊), 大鹿一正・渋谷克美(訳), 創文社.
[22] 濱野ちひろ. 2019.『聖なるズー』, 集英社.
[23] 濱野ちひろ. 2025.『無機的な恋人たち』, 講談社.

著者情報

佐金武(大阪公立大学)、大畑浩志(神戸大学)、高野保男(大阪公立大学)